九州大学学術情報リポジトリ

QIR 九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Title	[09] radix : 九州大学全学共通教育広報
Author(s)	
Citation	radix ‖ 9
Issue Date	1996-06-28
URL	http://hdl.handle.net/2324/20374
Right	

This document is downloaded at: 2013-02-16T23:29:31Z

Kyushu University Institutional Repository (QIR)

radix

radix(ラーディクス)は，根，根源を意味するラテン語。ヒトの根源にまなざしを向け，豊かなこころの根を広げたい。

1996 6.28
九州大学全学共通教育広報 No. 9

きり絵「和白干潟のミヤコドリ」(12・13頁参照)

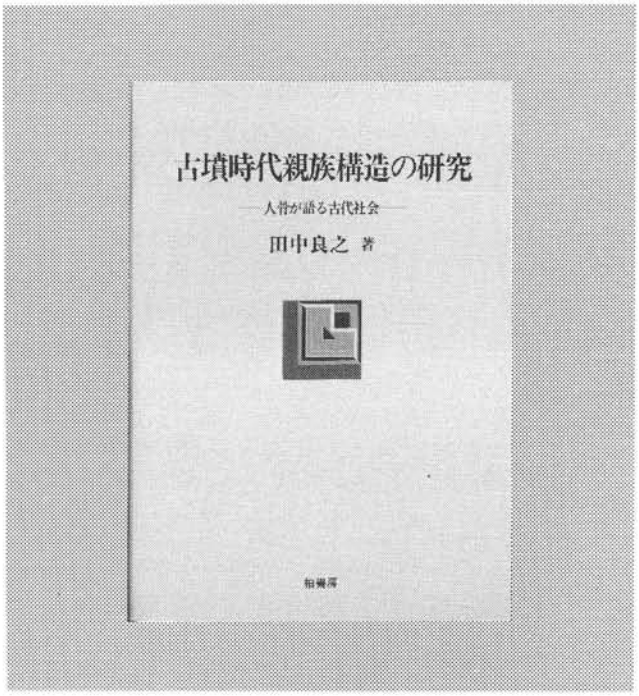
比較社会文化研究科
田中先生の「雄山閣考古学大賞」の受賞について……溝口　孝司… 2
比較社会文化研究科生物系院生紹介　比文・生物系大学院生… 4
比較社会文化研究科の「実像」　内山　一幸・福嶋　寛之… 6
「東へ西へ」 Part 4……瀬戸　優子… 7
ＨＩＶ訴訟を支える会・福岡……永友　英之… 8
鴻巣山の自然　―わが吟行コース―　賀来　章輔…10
九重共同研修所へのご案内……宮崎　末徳…11
和白干潟に来ませんか……くすだ　ひろこ…12
インターネット
インターネットについて……樋口　忠治…14
サイバースペースにおける遠隔と近接　ヴォルフガング・ミヒェル…16
自己実現に向かって……澤野　伸弥…18
45年まえの六本松キャンパス……編集委員会…19
〈新任教官自己紹介〉
木塚　崇・金　宰賢……20
高橋　里美・栃原　浩……21
長野　剛・松田　光司……22
六本松地区教職員異動(省略)……23
あとがき……24

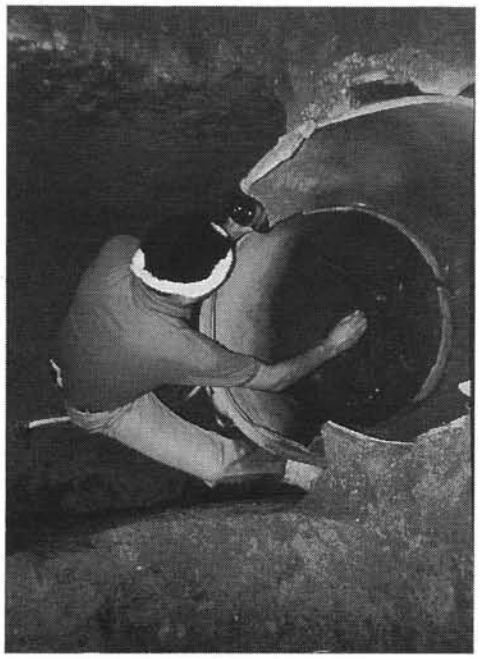
田中先生の
雄山閣考古学大賞の受賞について

溝口孝司

このたび，大学院比較社会文化研究科・基層構造講座の田中良之教授が，著書『古墳時代親族構造の研究：人骨が語る古代社会』(柏書房，1995年）により雄山閣考古学大賞を受賞されました。今回で5回目を数えるこの賞は，それぞれの年度に出版された考古学関係の書物の中から，最も優秀，かつ考古学会への貢献が著しいと認められたものに与えられる賞です。

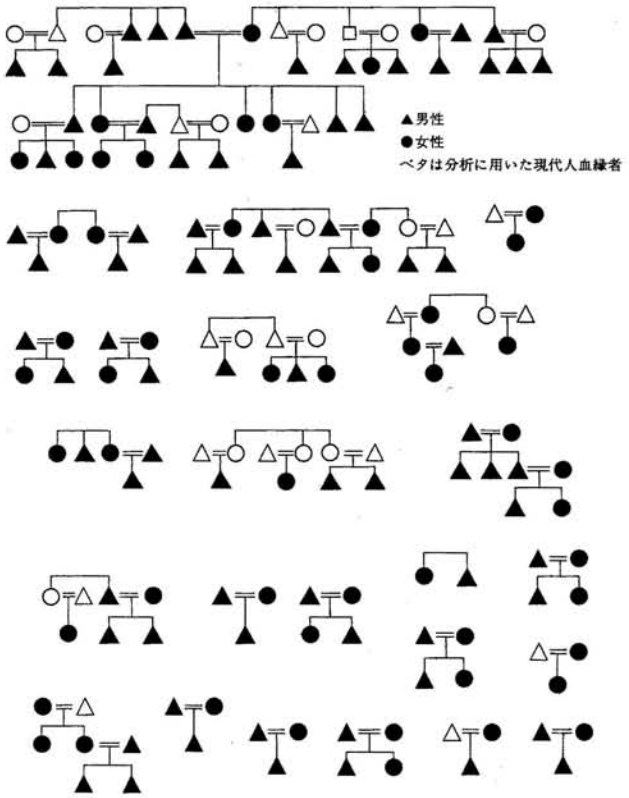
日本の原始古代の親族関係の研究，すなわち，どのような人間どうしのつながり，なかでも，どのような血のつながりに基盤をおく約束ごとにもとづいて，人間の集団が形作られ，日々の暮らしが営まれていたのか，権利や財産はどのように代々うけつがれていたのか，このような問題に関しては，日本史・考古学・人類学などの研究者たちによって，これまでにも多くの優れた研究がなされてきました。しかし，日本史研究の立場からすると，文献資料の存在以前の先史時代の親族研究は，考古学・人類学などの研究成果と，文献資料にみられる親族関係とを較べ，それらのあいだのギャップを推察で埋めながら，一つの仮説を構築して行くというものでありました。また，考古学研究の立場からの親族研究も，墓地に埋葬された人々の，人類学的に判定された女・男の別，年齢の違いなどに基づきながら，やはり，一定の推察を加えて，親族組織の大きさや内容を推定するにとどまらざるをえなかったのです。要するに，『靴の底から足の裏を掻く』ような歯がゆさを，日本史研究者・考古学研究者は長く味わってきたわけですが，これもひとえに，まさに親族関係を取り結んでいた人々そのものの『なきがら』である人骨資料から，親族関係を直接復元することができないことに，その最大の原因があったのです。



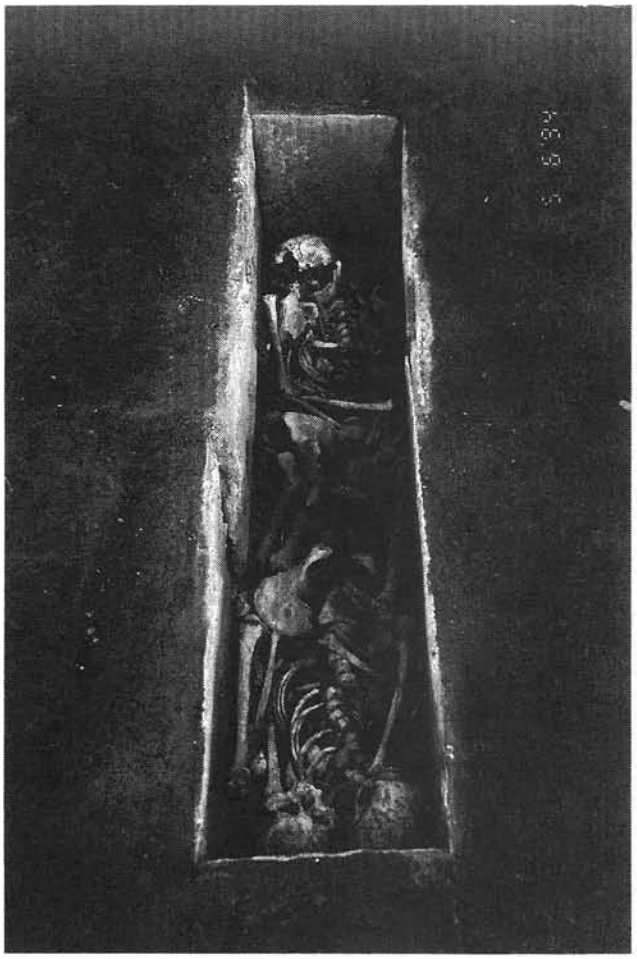


発掘中の田中先生

田中さんは，前の任所である九州大学文学部附属九州文化史研究施設助教授に就任する前，考古学専攻生として九州大学大学院文学研究科博士後期課程を中退した後，九州大学医学部解剖学第2講座に助手として10年間勤めたというユニークな経歴をもっています。そのような若くいそがしい毎日のなかで，田中さんは人間の『歯』の平面の形状が，遺伝情報のすぐれたマーカーであるという事実に目をつけ，多くの現代人の歯を測り，分析することによって，個人と個人の血のつながりを最もよくしめす歯の組み合わせを見つけ出しました。そして，その結果を利用しながら古墳時代の人骨の歯を計測・研究し，その結果を考古学的な情報と総合させました。お墓から出てくる人骨どうしのあいだに血縁関係があるか，もし血縁関係があるとすれば，それは親子の関係か，それとも兄弟／姉妹の関係か，そのような問題を，お墓にもぐり，骨を掘り出し，研究しながら，一つ一つ解き明かしていったのです。その結果が今回の研究，すなわち，古墳時代という日本の古代国家のなりたちという歴史的に重要な時期の親族構造とその変化に関する研究として実ったわけです。この研究によって，日本史・考古学それぞれの立場からの原始古代親族関係の研究は，共通の，たしかな足場をもつこととなりました。また，このような研究は，その完成度から見て，世界的にも類例のないものです。そのことも，この研究の価値の高さを示しています。



分析に用いた現代人血縁者(著書より)



10年におよぶ研究の道のりで，田中さんは多くの人々とふれあい，かけがえのない仲間をつくってきました。研究者としての田中さん以外の田中さんの姿にふれ，あたたかなものを感じた人も多いとうかがっています。そのようなふれあいの一端は，一部の考古学研究者達のあいだでは『本文編よりも重要で，しかも面白い』とささやかれているこの本の『あとがき』からも，うかがうことができます。

田中さんの日常は，とにかく『いそがしい』の一言につきます。健康だけには十分気をつけられて，これからも，名実共に陣頭指揮で先史学を学ぶ学生達をひっぱり，また先端的研究をぐいぐいと進めていってほしいものです。 (比較社会文化研究科)

比較社会文化研究科生物系院生紹介

比文・生物系大学院生

4号館3階の一番奥の部屋，昨年まで講義室として使われていた部屋が私たち比較社会文化生物系の研究室です(通称大奥)。ここで，その住人たちを紹介したいと思います。

D 1

天野一葉

比文修士1号。怪人2号。鳥の研究をしています。自分の声をカセットで聞いて恥ずかしがっている。

祝　輝男

私は〝ハナアブ〟です。花の蜜や花粉を食事としているのですが，鹿児島の蜜は食べ尽くしたので，今年から福岡の蜜にします。花から花へと優雅に飛び回っているので，声かけて下さい。

坂井　誠

ヒロズコガという小さい蛾の分類をしています。変人ではありますが，変態ではありません。よろしくお願いします。

末永英規

尊師。チョウチョのモニタリングと生態の研究をしている。たまに宙に浮いている。みんな気をつけてね。

土合紘貴

北海道からショウジョウバエを尋ねてやってきました九州大学。住み慣れた北海道を後にして来たのは良いけど淋しいな。賭事も，酒も，女もしない上に，人と話すのが上手くない私ですが，最後に一言言わせてね。「私，バックがいいの。うふっ」

中村剛之

ガガンボの分類。「最近中村さん，調子乗ってますね。」と言われている。かっこいい坊主の先輩である。

桧垣みどり

クワズイモ（サトイモの仲間）の研究。

平川朝子

ノネコの生態の研究。葉子に，追っかけられながら，私はノネコを追っかけています。たくさんノネコ(20頭以上)がいる所があったら教えて下さい。

桝永一宏

ジャンボ。自称ジンバブエ共和国出身，モアイ像とインド象の比較形態の研究を行う晴れ男。夜に道で会っても暗くて（黒くて）よくわからないらしい。

吉澤和徳

チャタテムシという昆虫の分類をしている。チャタテムシ研究では，日本の第一人者（ただし日本に一人しかいない)。新潟県出身。右投げ右打ち。内角高めは女打ち。

M 2

井上亜古

マッハの世界で勝負する飼育委員長。オドリバエの行動を研究している。おーい，起きてるかー。

末吉昌宏

時計の秒針のように，皆のために働き，常に控えめな好青年。10年に一人の大天才。好感度№1。ミバエの分類の期待のホープ。

舘　卓司（たてとちゃうでぇ，よお見なあかんでぇ）

My name is Tachi. I am studying TACHInidae. Please TOUCH me. ほんまに触ると逆水平をお見舞いするぞ。おかん，おとん頑張ってるでぇ！　イムズに入れない症候群。「大きなのっぽの古時計おじいさんの時計」が口癖。好きな言葉は「ガッツだぜ」。

M 1

片岡英子

シジミチョウの卵殻構造と，卵の形成過程について研究している。

清水多恵

猫の研究パート2。おとうさんがフランス人のため，髪の毛が赤い。キャシャーンを歌わせたら，日本で5本の指にはいる。

研 究 生

杉本美華

比較社会文化生物系で，一年間英語の修行に阿蘇山からやってきました。毎日英語と，かわいらしい子どもたち(20匹のスズメガの幼虫)の世話をしています。

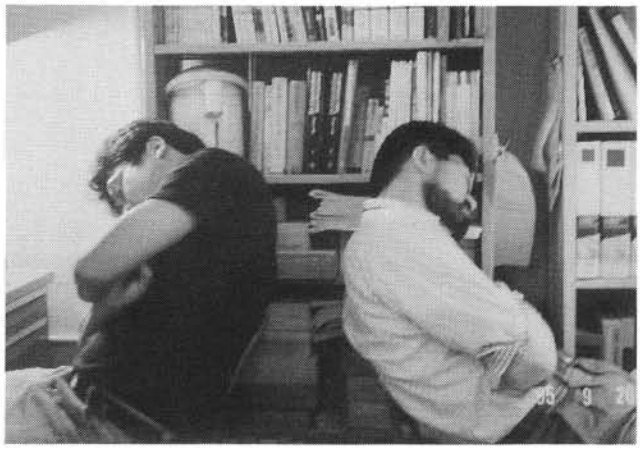
また，廊下やエレベータの脇の住人たちもついでに紹介しておきます。

みんなの人気者スナネズミファミリー

(住所：3階エレベータ横)

あけみ　スナネズミ　おかあさん
ぴるる　スケベネズミ　おとうさん
耕作　　くろねずみ

その他大勢，現在10匹。かわいがってね。(子どもが生まれたとき，大奥に来るともらえるらしい)



廊下の水槽の住人たち

ギギ　　ナマズに似ているが，ナマズにあらず。
まりも　水槽の住民。感情を持ち，うれしいとはねるらしい。

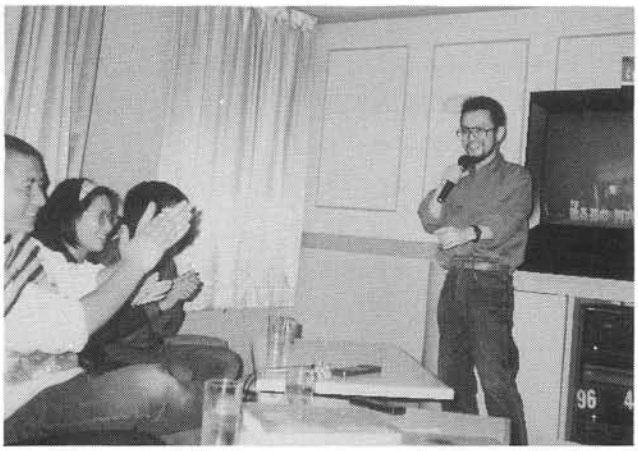
そ の 他

ワモンゴキブリ　4号館3階の西側角に住み，皆に恐れられている。
みるわーむ　　三枝先生のペット
ヤマガラ　　3日間療養した小鳥。みるわーむをたらふく食いながら，まだ恩返に来ない。
あいがも達　　誰かに食べられたかも。

企画3連発

あなたの怪人度チェック!!

奇妙な収集癖がある	YES	NO
文章でなく，単語で会話をする	YES	NO
上を向いて歩く	YES	NO
マゾである	YES	NO
無意味な殺生をする	YES	NO
時間を気にしない	YES	NO
某女子大出身	YES	NO



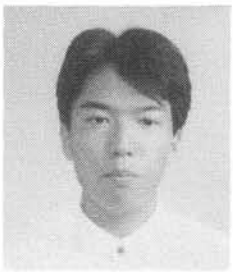
あなたのキックボクサー度チェック!?

髪が気になる	YES	NO
目玉模様が恐い	YES	NO
酒が恐いが，つい飲んでしまう	YES	NO
離せばわかる	YES	NO
カバンとぬいぐるみの識別が出来ない	YES	NO
好んで女性を助手席に乗せる	YES	NO

あなたの社長度チェック

泡盛を飲むとけいれんする	YES	NO
信号を見落とす	YES	NO
感情をあまり出さない	YES	NO
自分が常に正しい	YES	NO
俺ってかっこいい	YES	NO

※以上いずれも，YESが3個以上あると，院生生活に支障をきたす事がありますので，注意して下さい。



比較社会文化研究科の「実像」

内山一幸・福嶋寛之

A 「比研」て何の略称なんですか？ 確か教育学部にもあるんじゃないんですか？

B そうそう，「比研」というのはさあ，本当は「比文」なんだけどね，なぜか「比研」と呼ばれているらしいね。

A 一体，何の略なんですか？

B 比較社会文化研究科というんだけどね。英語では Social and Cultural Studies 。略称ＳＣＳというんだよ。

A で，どういうところなんですか？

B 大きな特徴としては学際研究でしょう。大きく分けて日本社会文化と国際社会文化の２つの専攻があってその下に講座が９つずつあるんだけど，これはあくまで便宜上のもので形式上のものにすぎないんだけどね。

A どういうことですか？

B 基本的に学際研究は枠を取っぱらって隣接分野の成果を吸収しながら研究を進めていくものだからだよ。だから今言った様に形式上のものだから，学生はどこの講座に属するというわけではないんだよ。

A 具体的にどういうことがやれるんですか？

B そりゃ何でもだよ。文科系から理科系まで。それが学際たる所以だよ。だから歴史，政治，経済から生物，地学まで同じ場所で研究するんだよ。そしていろいろな人のいろいろな研究を聞くことができるんだよ。これが最大のメリットかな。もう少し付け加えると研究分野も多彩だけれど，学生自体がまた多彩だね。ほとんどが他大学出身で，年齢層も20代から60代までいるから先生よりも年上の学生とかもいるんだよ。

A なるほど分りました。じゃあなぜそのような学際研究が必要とされるのですか？

B う～ん，簡単には言えないけれど例えば「国際化」と呼ばれる今の状況はね，人やモノの交流は非常に深いけれども，その際どうしても異文化理解というものが必要だと思うんだよ。言い換えれば自己の価値観を絶対視しない立場が求められていると思うんだよ。そしてそういった観点を養うために学際研究が必要じゃないのかな。

A 他にも理由はないんですか？

B そうだね。あとは学問と社会との関係を考えた時に，現代社会が直面している問題はね，どれひとつをとっても今までの研究の枠を越えた複雑さと広がりを持っているんだよ。だからどうしても学際的な研究をしなければならないんだよ。

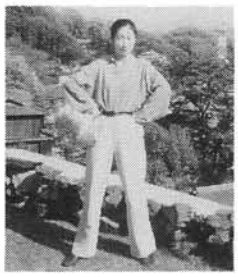
A しかしバラバラに研究をしている学生とどの様にして一緒に研究を進めていくのですか？

B 比研の制度の特徴のひとつはね「指導教官団」制なんだよ。よその大学院では一人の学生には一人の指導教官しか付かないけれど，比研では三人の指導教官を選べるんだよ。それに総合ゼミという授業があってね，ここでは複数の教官とその教官に指導されている学生が同時に参加してね，お互いに刺激を受けられるシステムになっているんだよ。この様に比研では学生が様々な分野の学生や教官とともに学ぶ場を設けているんだよ。

A へえー，良く分りました。

B ところで君はここまで詳しく聞くってことは比研に来るつもりなんだろ？

A ドキッ，私は永久就職ですから。それでは失礼いたしました。 （日本社会文化専攻修士１年）



「東へ西へ」 Part 4

瀬戸優子

うずうずそわそわ，本の旅へのご案内「東へ西へ」も第4弾，今回は，〝男女の壁は突破する。自分は自分だ！〟のメッセージをあなたに。

今日は酔って，精神が昂揚している。そして，この原稿を締切2週間過ぎにして一から書き直そうとしている。おお，なんて大胆な・・。ただし，積み上げてきたものを自分で底からくつがえすエネルギーはいくつになっても捨てたくない。・・・大げさな。

この世に生を受けて27年，男女差別を肌で感じた覚えがない。ましてやセクハラなんてとんでもない。だから，男女平等だとか何とかがんばるのも好きじゃない（もちろん，がんばってくれた女性たちのおかげなのだが)。

それじゃ全く意識しないかというと，それはウソだ。会社というテリトリーを女性に侵されまいとセクハラに走るオヤジもみっともないが，やはりどこかで女性のテリトリーを守ろうとする自分がいる。いやいや，そうやって男・女のテリトリーだと認識されるもの一強さ，優しさ，弱さ，甘え，台所，酒場一からお互い排除することで男である女であることをかろうじて証明しうる。――男のくせにゴキブリなんか恐がりなさんな！　なんて。

『イギリスはおいしい』(平凡社)のりんぼう(林望・はやしのぞむ)先生曰く，「男女平等を叫びながら，女性自らが女性差別的社会通念から脱出できずにいる」。同感同感，・・だがやはり自分を解放してあげるのは難しい。自由になるには自分が必要だ。『結婚・離婚・女の居場所』(目黒依子著，有斐閣)・・自分の居場所は自分でつくるもの。世界との関わり合いの中に，人間同士の関わり合いの中に自分がいる。

今や『男性神話』(彦坂諦著，径書房）も崩れ去りぬ。会社の自分のポストが自分の居場所だと信じて疑わなかった男たちが，バブルはじけて会社から裏切られた（と彼らは思う)。

もはやテーマは「男vs女」ではない。「まず個ありき。そして，You and I」である。成熟した女である以前に，成熟した個でありたい。

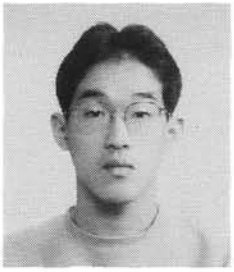
りんぼう先生はこうも曰く,「なぜに日本女性は自分の年齢を隠したがるのか。それは，女性は若いほど価値があるような，差別的通念に女性自身がとらわれているからだ。」年を重ねるほど深みがまし素敵になってゆくはず。男は渋く，女は艶がでる。『エイジズム：おばあさんの逆襲』(樋口恵子著，学陽書房）よ今こそ。『サライ』5月号で，明治生まれの現役の女性の特集を見た。人生を積み重ねた80人のおばあちゃん達の顔はそれはそれは美しい。

成熟した個は，成熟した社会に育つ。夫婦別姓問題について，学者らしき男性が,「別姓になると，義父母へのつながりが薄れ，面倒を見なくなる」というような的外れな反対論を述べ，あまりの情けなさにしゅんとさせられた。こういう人に何をいってもダメである。これはいつまでたっても成熟できない日本社会の象徴。この象徴は，いたる所にあらわれる。非加熱製剤によるＨＩＶ感染問題しかり，住専問題しかり。

日本人，日本社会は真剣に「個」に向かい合うべし。わがりんぼう先生は，軽く快くそのことを教えてくれる。

『イギリスは愉快だ』(林望著，平凡社)
『ホルムヘッドの謎』(林望著，文芸春秋)
『林望が能を読む』(林望著，青土社)

女性関係の資料が最近まとめて図書館に入りました。すべて開架閲覧室に配架されています。詳しくは図書館のカウンターにお尋ねを。　　(農学部図書掛)



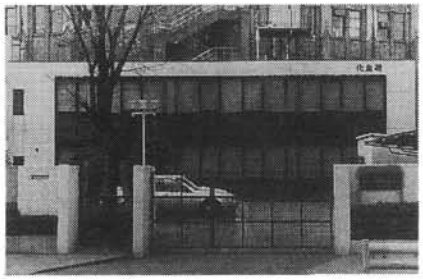
ＨＩＶ訴訟を支える会・福岡

永友英之（ながともひでゆき）

３月29日に東京・大阪ＨＩＶ訴訟の和解が成立しました。川田龍平君はこの日を「今まで生きていて一番うれしい日」とまで言ったくらいに大きな，そして画期的な出来事でした。

ＨＩＶ感染事件を知って

この事件を私が初めて知ったのは約３年前，医療問題を考えるサークルの中でのことでした。「血友病患者の間にもＨＩＶ感染が広がっている。しかも約2,000人の人が感染している」ということを知ったときは，どうしてそういうことが起こったのか，わけがわからなかった，というのが正直なところです。



化血研と厚生省の写真は，東京ＨＩＶ訴訟原告団等が発行した「いま，生命の重さは」より，許可を得て転載したものです。

化血研東京営業所

調べていくうちに，安全な加熱製剤の許可が日本ではアメリカよりも２年４ヶ月も遅れたこと，エイズ研究班の班長は非加熱製剤の危険性を認識していながら患者向けには「安全だ」と話していたことなどを知り，「これはとても許せない事件だ」という気持ちを持つようになりました。また，「これがこのまま放置されていたら，私たちは毒を患者さんに打つことになるかもしれない。安心して患者さんに薬を出せるためにはどうすればいいのだろう？」と考え，機会あるたびにこの実態や「二度と薬害を起こさないためには」などということを訴えていきました。

裁判，カミングアウト

同時に，この裁判は国を相手にしているので，かなり厳しいものであること，そしてエイズに対する偏見は強く根深く，原告になった人は顔すら見せられない状況だということも分かってきました。「どうしようもない。いくら頑張ったところで勝てないし，勝てたとしても十数年かかるかもしれない」というような思いを私たちが抱くこともしばしばありました。

しかし去年３月，状況は大きく変わりました。川田龍平君のカミングアウト（公表）をきっかけにして多くの若い人たちが「これは許せない」と思って立ち上がり，自分たちの方法でその怒りを表しました。1995年という年は，１月の阪神・淡路大震災や３月のオウム事件，さらには９月の米兵による少女暴行事件に見られるように，暗い・先が見えないと思わせるような出来事も多くありましたが，この薬害エイズ事件に見られるように，私たち若者が自分たちの正義感を素直に，みんなでいっしょに形にすることのできた，大きな意義のある１年だったと思っています。

厚生省

ＨＩＶ訴訟を支える会

私は，「ＨＩＶ訴訟を支える会・福岡」（以下，「支える会」）に入っています。この活動を通じて，みんなでいっしょに行動することが大きな力になることを知りました。今年３月の和解までに国を変えた大きな出来事の中から二つ取り出して思うところを述べてみます。

① 95年７月24日　「人間の鎖」

厚生省前に若者を中心に3,500人もの人が集まり，厚生省を人間の輪で取り囲もうとしました。後になって厚生省の官僚自身が「あれは効いた」と言ったそうです。厚生省は，若者が動いたことによるマイナスイメージの大きさを感じとり，「優秀な人材が入らなくなる」ことを恐れた，といいます。

② 96年２月14～16日　「すわりこみ」

私たちにとって２月16日は忘れられない日になるでしょう。菅直人厚生大臣が国の法的責任を認め，謝罪を行ったのです。これは何といっても「被害者本人が立ち上がって被害の実態や自分の思いを率直に訴えたこと」による成果です。しかし，大きな差別や偏見のある中で被害者を立ち上がらせたのは，全国の支援する人たちでした。「すわりこみ」に参加した人，署名に

左／あやまってよ95・パート2
渋谷をラップでパレード
右／あやまってよ95
全国統一行動「日本中でおおさわぎ」
下／あやまってよ95
厚生省を取り囲む「人間の鎖」

これらの写真は，全日本民主医療機関連合会が発行した「Medi-Wing」より，許可を得て転載したものです。

協力した人，テレビでこういう事件を知って怒った人などの力は大きかったと思います。

和解・解決へのあしがかり

この後，企業とも和解の合意に至り，3月29日に和解が成立したことは，冒頭に述べた通りです。

では，なぜこの和解は「画期的」とか「歴史的」とか言われるのでしょうか？　また，この和解で本当に薬害エイズ事件は解決したのでしょうか？

私はこの和解のポイントは国や製薬企業に謝罪させたことに尽きる，と思っています。謝罪することによって初めて，国や企業はエイズの発症予防や治療（恒久対策）に責任を持つことになりますし，エイズに対する差別・偏見をふりまいたことに対してそれらを取り除く義務を負うことになるのです。

しかし，恒久対策といっても中身はまだ白紙です。この内容を充実させるのも，しょうもないものにするのも今からの頑張りにかかっています。九州はエイズ医療が特に遅れている地域で，未だにカリニ肺炎などの簡単な病気で亡くなる患者さんがいるそうです。こういったものを充実させる活動も必要ですし，今回の和解で救済の対象になる人は，被害者のほんの一部にすぎません。提訴できてない被害者の人たちをどうやって救済するか，ということも今からの活動にかかっています。そして「二度と薬害を起こさない」ために

最も重要である「真相究明」はほとんど進んでいない状態です。これをあいまいにせず，責任を明確に取らせていくことも必要です。これらはまだ一部ですが，一つ言えることは，「和解は解決」ではなく，「和解は解決の足掛かりにすぎない」ということです。これからも被害者を支えるために，もっと多くの人々の協力が必要です。ぜひ，「支える会」に入会していっしょにがんばりましょう。連絡先は末尾に載せておきます。

なぜこの運動に関わるのか

最後に，私の思いについて。「なぜこの運動に関わるのか」とよく聞かれます。もちろん，「許せなかった」という思いがここまで自分を動かしたのは言うまでもありませんが，もう一つは「やってて楽しいから」でしょう。「支える会」に参加している人は，薬害エイズ事件を知って「何とかしたい」という思いをみんな持っています。だからこそ，その中での友人はかけがえのないものだし，そういう人たちといっしょに楽しく活動することができるのでしょう。

また，この「支える会」に参加して自分自身が大きく成長していったのに気づきます。私は医学部の学生ですが，自分がこの活動に参加することなしに医者になったら，と考えると肌寒くなります。「支える会」に参加していろいろな学部・職種の人と知り合いになることができました。その中には，大きな影響を受けた人もいるし，あまり影響を受けなかった人もいますが，自分の人間としての幅は確実に広がりました。ここで学んだことを社会に還元していければいいな，と思っています。これを読んだ方と「支える会」で出会えることを楽しみにして待っています。　（医学部5年）

◎HIV訴訟を支える会・福岡
〒810　福岡市中央区桜坂3-12-78-205
不知火書房
電　話　092-781-6962

鴻巣山の自然

―わが吟行コース―

賀来章輔

鴻巣山は中央区と南区の境界に位置する約100mの小高い丘といった程度の山である。六本松キャンパスから南に向けて南公園・小笹の丘を越えたところで，徒歩でも30分で行くことができる。この山はマテバジイ・シイノキ・クヌギ・コナラなどからなる雑木林（二次林）である。最近，「里山」という言葉が新聞・テレビなどに見られるようになったが，鴻巣山もこの里山の一つである。里山というのは，つい50・60年前までは，われわれの祖先が，日常の生活に必要な燃料にした薪や、農耕のための肥料を作るための落葉を集めに行った雑木山である。鴻巣山の代表的な照葉樹であるマテバジイには，度々伐採されたと思われる跡が残っていて，「薪炭林」だったことを伺わせる。現在は根元から萌芽した枝が大きくなって欝そうとしている。家庭での燃料が薪や炭からガス・石油に代わり，全国的にも里山の薪炭林としての役割は終った。現在では造成されて宅地になったり，放置されて藪となったところも多い。しかし住宅地に近接したところに残った里山は，住民の生活環境として，また子供の環境教育のためにも非常に重要であり，保全の必要があることが生態学的に指摘されている。

この鴻巣山に，福岡市は昭和56年，約2キロの遊歩道をつくり，小笹・平和・長丘などから入って，尾根筋を容易に縦走することができるようにした。私もかって，この遊歩道を植物のゼミの学生の野外実習のフィールドとして一緒に歩いたことがある。平素の利用者はあまり多いとは云えないが，この遊歩道をゆっくり歩くと，四季折々，植物・昆虫・鳥類などかなり沢山の生物に出合うことができる。雨の後には森の独特な臭い（フィトンチッドが発散している）がして森林浴をした気分になれる。またこの遊歩道は市の公園墓地としてもっとも古い平尾霊園に隣接しているので，その外周を歩くと，森林内とは異なる生物相に接することもできる。

私は，この山の南面の中麓に20年来住んでいるので，停年退職後は，運動不足解消のため，都合のつく日はできるだけこの森をウォーキングすることにしている（昨年は120回）。ところが一昨年，森のなかで「どんぐり」が林床に落ちる音を聞いて，全く偶然に「団栗の落つる音ひびき森しずか」という一句が浮かんできた。それを機に俳句を本腰をいれてやることになった。現在は，元同僚の田代崇人（ドイツ語）氏ご夫妻の勧めなどもあり地元の「円」（主宰　岡部六弥太）という結社に属し相当にのぼせているところである。

俳句をやりはじめると，この遊歩道のウォーキングは，吟行（俳句や短歌を作るための題材を求めて歩くこと）の方にウエイトがかかるようになった。それまで歳時記や季語については無知であった私が，いまでは植物・動物（とくに昆虫・鳥類）などの季語との出会いを期待して歩くようになった。四季折々，今日は何に出合えるかを楽しみにし，出合った季語で俳句を詠むことは，楽しい知的な遊びであり，心を豊かにさせてくれる。まだ初心であるがこの鴻巣山一帯を歩きながら詠んだ句を示すことにする。

- 冬木立小啄木鳥打つ音確かなる　……1月
- 接骨木のいの一番の芽吹きかな　……2月
- いつになく華やぐ森や百千鳥　……3月
- 青筋の揚羽舞ひをり樟若葉　……6月
- 斑猫やひと跳ねごとにわれ誘ふ　……7月
- 下闇や不意に飛び立つ蛇の目蝶　……7月
- 墓に立つ鶏頭二本おし黙る　……8月
- さりげなくはや来てゐたり尉鶲　……10月
- 逆立ちて卵産み居る螳螂かな　……10月
- 森暗く目立つ犬枇杷黄葉かな　……12月

最近，環境保護・保全の重要性が強調されるが，歳時記に入っている季語も，年々，私達の身近では見られなくなっているのではなかろうか。山本健吉氏は「歳時記は日本民族のすぐれた創造物」といい，また「季語を眺めているうちに，祖先が磨きあげて来た美意識と知的認識の精髄がそこにある」とも云っている。けだし至言である。歳時記に親しみ，われわれの身近の季語を大切にしていくことは，日本人が自らの身近な環境を大切にしていく第一歩になるように思われる。

（九州大学名誉教授）

平尾霊園からみた鴻巣山

九重共同研修所へのご案内

宮崎末徳

九重共同研修所

研修所は昭和43年7月に九州地区国立大学の学生・教職員を対象とした研修施設として開所されました。この間，学生・教職員が寝食をともにしたゼミナールなど，学校内とは違った人間的交流の場として利用されてきました。特に昭和52年から実施されている九州地区国立大学間合宿共同授業は，研修所設置の主旨に沿った年間行事の一つとなっています。

研修所は装いも新たに再開します

研修所は，老朽化と研修内容の変化に応えられる施設として整備するため施設を閉鎖し，改修・新築工事にはいっておりましたが，このほど完成，7月11日から再開いたします。

新研修所には，宿泊棟（95人），研修棟（大研修室，中研修室，小研修室2，和室），それに2年前に完成した体育館があります。

体育館の新設以来，屋内の体育活動が可能となり，今回の改修では各研修室に視聴覚機器を備えましたので，多様なプログラムが企画出来ることと思います。

九大「山の家」

研修所に隣接して九州大学が独自に管理している九重研修所（「山の家」）があります。昭和12年に建設された50人収容の木造の建物で，山小屋風の造りです。仲間と語り合うもよし，読書にふけるのもよし，ともあれ落ち着く空間と言えましょう。

九重と久住

九重共同研修所の呼称は「くじゅう」，所在地の町名は九重町と書いて「ここのえ」と呼びます。九重山群の主峰久住山，南麓の久住町はいずれも「くじゅう」で，まぎらわしい呼び名ではあります。

「くじゅう」へどうぞ

九重共同研修所と「山の家」は，海抜1100m，阿蘇くじゅう国立公園特別地域内の大分県玖珠郡九重町筋湯にあります。久住山，大船山，三股山など1600mを越える山々が近くにあり，周辺には筋湯温泉をはじめ数々の泉源が山間に湯煙を上げています。春には新緑，夏を飾るシャクナゲとミヤマキリシマ，秋を彩る紅葉とすすきの群落，冬は樹氷と雪化粧した山々など，四季それぞれに素晴らしい景観が展開しています。

研修，レクリエーション，ハイキング，山登りに，九重共同研修所や「山の家」を利用してください。

「山の家」をベースキャンプとして九重の峰々に踏み入れば，きっと生涯忘れ得ぬ学生生活の思い出として脳裏に刻まれるにちがいありません。

「くじゅう」へどうぞ。　（学生課総務掛長）

※九重共同研修所，「山の家」利用申込の方法，手続きは「学生案内」にのっています。参照してください。六本松地区での手続きは，寮務・課外活動掛（課外活動共用施設窓口）で取り扱っています。

和白干潟に来ませんか

きりえ画家：和白干潟を守る会
くすだ　ひろこ

渡り鳥の中継地，越冬地である和白干潟。和白で生まれ育ち住んでいるくすださんに執筆を依頼しました。(編)

ふ る さ と

あなたは原風景ともいえる，故郷の自然の風景を持っていますか。和白の海で泳いで育った私にとって，和白干潟はなつかしい原風景の１つです。子供だった私を育んだのは，故郷・和白のあふれるばかりの自然であり，そこでの人々とのかかわりだったと思います。

緑あふれる野山は四季を力いっぱい歌います。広々とした田畑は，うるおいや安心感を与えます。波静かな和白干潟は，子供たちを水で遊ばせ，人々を恵みの海産物でうるおします。四季を通じて魚貝類，エビやタコ，のり等の食物で人々の命を救い，干潟や浅海域の生物たちの営みで海水を浄化してきました。稚魚や稚貝を育て，和白干潟は生き物たちの命のゆりかごだったのです。

私の命―心も体もこの和白干潟を通して育まれました。自然の美しさや雄大さ，そして厳しさは，感性を豊かにします。和白干潟の自然とのかかわりは，私を創作活動へと導いていきました。大人になった今も，和白干潟は心の安らぎを与えてくれます。

冬の和白干潟にはたくさんの水鳥たちが越冬しています。カモやカモメ，シギやチドリ，サギなど221種もの野鳥が観察されています。特にミヤコドリの定期的渡来地として全国的に有名です。夏の和白干潟は，カニや貝やゴカイなど干潟の小さな生き物たちの繁殖期です。干潟を歩くと，かわいい小ガニたちがハサミを振る姿に出会えます。和白干潟に来てみませんか。

和 白 干 潟

今，博多湾の開発が進んで，干潟や浅い海域が次つぎにと埋めたてられ，この命のゆりかごが失われてきました。また，福岡市の人口が増加して，家庭排水の博多湾への流入が増加し，博多湾は富栄養化して，ヘドロ域が増え，弱ってきています。

遠い昔から生き物たちや人間の命を育んできたこの和白干潟を，私は守ってほしいと願っています。現在では水鳥の飛来地として国際的に重要な湿地だと，環境庁も言っています。大都市となった福岡の子供たちが自然を体験し，学ぶ場所として守っていきたいと思います。自然にふれ，野生の生き物たちに接することで，子供たちは命のサイクルに気づき，自分が自然の一員であることを自覚し，人間として生きることを学んでいくでしょう。私たち大人は子供たちに，世界中で壊れつつあるこの大切な自然環境を，守り伝えていく責任があるのです。

環境庁の調査では，戦後約４割の干潟が埋め立てな

ハクセンシオマネキ

初　冬

どで消滅しました。現在日本に残る干潟のほとんどが埋め立てや干拓などの開発計画が進行しており，破壊の危機にあります。干潟は地球上で熱帯雨林と同じように生物が豊富であり，生産性の高い場所です。漁業やリクリエーションにかけがえのない場所です。安全で広く生物の豊富な干潟は，遠く南北に渡りをする水鳥たちの越冬地，中継地として重要です。

世界中で干潟などの湿地を守るラムサール条約ができ，締約国は国内の重要な湿地を登録して守る努力がなされています。今年3月にオーストラリアのブリスベンで開かれた第6回締約国会議では，東アジアからオーストラリアまでの「シギ，チドリ類保護区ネットワーク」計画が提案され，干潟と生息する渡り鳥の保全について議論されました。しかしラムサール条約登録湿地と同様に，重要な湿地のある自治体からの立候補が無いと登録されない仕組みとなっています。保全すべき水鳥の渡来地でありながら，博多湾(和白干潟)のように開発計画のある自治体は立候補をとりやめています。公共事業としての開発計画を見直す仕組みが日本にはないという根本的な問題があるからです。進行中の計画の見直しを含んだ実のある環境アセスメント法の成立が，日本の緊急な課題だと思います。

人工島工事が着工されて

1994年7月に福岡市は，市民や自然保護団体の反対を無視して，和白干潟沖に401ha もの巨大な人工島造成工事を着工しました。工期は約10年間の予定です。着工以来，博多湾の海水は濁り続け，ＣＯＤの値も博多湾全域で基準値を超えています。海水の富栄養化によるアオサの大量発生が起こり，沿岸でヘドロ化が進み，悪臭を放ちます。福岡市のモニタリング調査でも，工事以後，水鳥や底生動物が減っています。しかし市のモニタリング委員会では，悪影響が出ていても，それは人工島の工事のせいではないと言っています。これでは学者の良心が疑われると思います。影響が出たら，環境破壊行為はいったんストップして対策を立てるべきではないでしょうか。

和白干潟賛歌

和白干潟の自然保護活動

和白干潟を守る会は1988年から活動を開始しました。和白干潟の自然観察会や海辺のクリーン作戦などをしています。会員は和白干潟周辺の主婦を中心に，福岡市内の方や県外の方もいます。現在の会員数は約400名です。年に1回，秋に和白干潟まつりを企画しています。バードウォッチング・干潟の生き物観察会・海辺の植物観察会・コンサート・写真展・模擬店など，盛りだくさんの内容です。1,000人程の人々が参加しています。

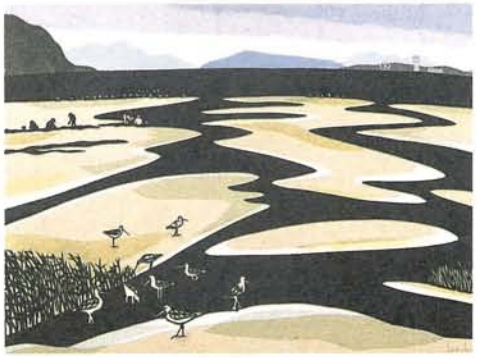
また和白干潟通信を年に4～5回発行しており，約3,500部を配布しています。自然案内のパンフレットやシールなども配布しています。1995年には，地球環境基金の助成を受けて，和白干潟の写真集を出版し，学校や公民館などには寄贈しました。一般の方には2,000円のカンパでお分けしています。

和白干潟では，日本野鳥の会福岡支部主催の探鳥会も毎月行われています。和白干潟を守る会は上記活動の他，博多湾市民の会や日本湿地ネットワーク，ＷＷＦＪ（世界自然保護基金日本委員会）などの自然保護団体とも協力して，博多湾和白干潟の自然保護活動を続けています。

夕　景

和白干潟を守る会

問合せ先：
〒811-02
福岡市東区和白１丁目14－37
山本廣子（くすだひろこ）
TEL･FAX 092－606－2256



秋の頃

インターネットについて

樋口忠治

まえがき

九州大学情報処理教育センターは分散したキャンパスにそれぞれ教室(端末分室)を配置しています。六本松地区には「特2」と「130番」という二つの教室があります。130番教室は1号館3階の東端にありますが，特2教室はこのキャンパスの北東隅にあって目につきにくいので，知らないという人がいるかも知れません。これらの教室では主として「情報処理基礎」などの授業が行われています。

平成8年4月から,全ての学部学生(1年生から4年生まで）にはユーザー番号が割り当てられることになり，現在は全ての学部学生がＵＩＤを持っています。従って，利用の知識さえあれば，だれでも授業時間以外はこれらの教室に入って，自由にパソコンを使うことができるのです。そして，この教室のパソコンを自由に使えるということは，すなわち(知識さえあれば)自由にインターネットの世界に入っていけるということを意味しているのです。

学生諸君はインターネットについて関心が高いと思いますので，ここで，六本松地区の情報処理教室のパソコンから，簡単に世界に向かって飛び出していく方法を紹介しておきます。

教　室

学生諸君にまず言って置きたいのは，第一に，これらのパソコンなどは皆で共同に使用する機器だということです。自分一人のものではありません。そこが個人のパソコンとは違うところです。飲食物などを持ち込むのは厳禁です。特に水滴がパソコンやキーボードの上に落ちるとこれらの機器にとっては致命的な結果になるのです。他人がぶっつかったなどという言い訳は通用しません。

第二に，教室の管理をする人手が無いということです。夜は8時過ぎまで自習のため開けていますが，この頃になったら，自発的に窓は閉めましょう。また，クーラーも電源をオフにしましょう。もし窓が開いたままになっていて，夜中に風雨が強くなったらパソコンは漏れてしまうでしょう。こうしたことが実際に起こると，教室は午後5時には閉めるということにもなりかねません。皆さんが困るのです。

パソコン

いわゆるパソコン，つまりパーソナル・コンピュータはその名称どおり個人で使うものですが，教育用としては各人に一台ずつというわけにはいきませんから，皆で共同で使うということになります。従って，マナーを守らないと他人に迷惑をかけることになります。乱暴な取扱いをしない，定められた手順を守るなどの基本的なルールが守れない人は利用する資格がないといっていいでしょう。プリンターでの印刷も紙の無駄使いをしないようにしないと，地球の環境を悪化させることに手を貸していることになります。

自分のホームページを作る

3.5インチのＦＤのフォーマットをして，そこにＨＴＭＬの書式で書いた自分のホームページをファイルとして持っていれば，インターネットの世界へ飛び出していくことは簡単です。その簡単な例を示しておきますから，自分でやってみてください。その際に注意したいのは，普通のワープロなどでは駄目だということです。次のようなテキストファイルを作ってください。

```
<html>
<head><title>HomePage</title></head>
<body><center>
<hl>My Home Page</hl></center>
<hr>
<h3>
Link to:
<ul>
<li><a href="http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~
higuchi/index.html">ILC</a>
<li><a href="http://www.cse.ec.kyushu-u. ac. jp
/">CSE</a>
</ul>
</h3>
```

```
</body>
<hr>
</html>
```

この際に注意すべきことは，￣印の入力です。キーの上では全く別のものが割り当てられていますから，注意しておいてください(右上端から2番目の上のを使う)。また，日本語ワープロWordなどでは作れません。

このようにして作ったファイルはＦＤの中のファイル一覧として見る場合，ＨＴＭＬのファイルとして特別の表示がされるようになっていますから，それをダブルクリックすることによって，アンカーとして記述されているＩＬＣに接続されることになります。このようなアンカーは自分で必要なだけ加えていくことになります。

ＦＤ上に作ったファイルとしてのホームページは，そのＦＤをドライブに設定している間のみ有効です。常時どこからでもアクセスしてもらうためには，ネットワークに接続されたワークステーション上にファイルを置いておく必要があります。学生諸君は全員がワークステーション上に自分のホームディレクトリを持っていますが，そこには必ず ".html" というサブディレクトリが用意してあり，そこにさき程作ったファイルを ftp 転送すればいいのです。もちろん，新しくそこでエディタ(mule)を使って作ってもいいわけです。パソコンの利用をするためのＵＩＤとワークステーションのＵＩＤは同じなので，何の問題もありません。手引きを見ればわかるでしょう。

ただし，折角ワークステーション上にホームページのファイルを置いたとしても，外部からそこにアクセスしてもらうためには，そのファイルがどこにあるかを記述している上位のファイルの中にアンカーとして書き込んでもらう必要があります。それをどのようにして解決するかは今後皆さんで考えてください。

インターネットは世界を変える，世界観を変える

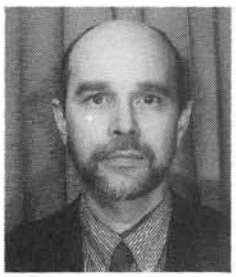
この一年間に「インターネット」という言葉はまたたく間に有名になりました。しかし，その実体を知っている人はそれほど多くはないでしょう。なぜなら，その世界をすべて見てまわるということは時間的にみて不可能といっていいほどに広大だからです。好奇心の旺盛な学生諸君が関心を抱くのは当然のことですが，平成8年3月までは設備と制度が整っていなかったのです。そしてこの4月から初めてそれが可能になったのです。

現在，世界中の大学がこのインターネットに接続されていて，皆さんがアクセスできるところは2500以上あり，今後も増加の一途をたどるものと思われます。これまで大学生は自分の入学した大学のことしか知ることはなかったし，知る方法もなかったわけですが，これからは世界中の大学の情報をいつでも見れることになったわけです。現在はまだ世界の情報化は序の口であるといっていいでしょう。これから21世紀にかけて，情報化は予想もできないほどに進展していくと考えられます。

例えば，今すでに多くの新聞や雑誌がインターネットを通じて提供されています。TIME，CNN，The Guardian, The Daily Telegraph, Die Welt, Spiegel などなど。このようなニュースを見ることは外国語の勉強にも大いに役立つでしょう。先ほど作った皆さんのホームページにアンカーとして埋め込んだ ILC からは，Space Shattle Launches へのリンクも用意していますが，そこでは発射計画のすべてを見ることができます。九大ＯＢの若田氏の情報も見ることができます。これらはＮＡＳＡの全体の中のごく一部に過ぎません。

現在，こうしたインターネットの世界は急激に拡大しています。爆発的といってもいいでしょう。社会のさまざまな分野で，いままで考えられなかったようなことが起こりつつあるのです。大学や研究機関は比較的保守的であるように思われます。学生諸君が21世紀の世界と日本を担っていく時に，こうした情報化の知識と方法を十分に理解し，活用していってくれることを期待しています。 (言語文化部長)

上の写真と24頁の写真は，九州大学六本松地区のホームページを飾った，95年度のタイトルイメージの一部です。原画はシステム情報科学研究科ＤＣ２年の大月美佳さんに描いていただきました。 (編)



サイバースペースにおける遠隔と近接

ヴォルフガング・ミヒェル

不思議の国の日常だ。研究室に入ると，上着を脱ぐのももどかしくコンピュータのスイッチを入れ，研究仲間や友人からの電子メールに目を通す。なるべく早く返事を送る。届いた文章には手を加えて返送できるので，文の書き方がかなり変わってきた。文体は簡潔で直接的になったが，その流れや優雅さは失われた。ラブレターとしては相変わらず便箋の方が喜ばれるであろう。いずれにせよ，私はこれまでよりも多く文章を書くようになった。封筒に宛名を書く手間もいらず，郵便局で待つ必要もない。一日もしないうちに，大抵は返事が入ってくる。全ドイツの電話帳を載せたCD-ROMのおかげで，幼稚園から大学まで学友であった仲間たちの行方がわかるようになった。インターネットのおかげで改めて，親友になった者もいる。8時間の時差もなくなり，相手が少し早起きさえしてくれたら，インターチャット(interchat)を利用して直接的なやりとりすらできる。技術的には面白いだろうが，少々頭が薄くなった今(写真参照)，カメラを買う気にはならない。

時間があれば，USENETにちょっと入ってみたりもする。そこでは学問的な問題の論争から映画俳優のファンクラブに至るまで何千という「ニュースグループ」がひしめきあっている。それぞれに全世界から様々のニュースが集まってくる。理性と感性，問い合わせ，提案，主張，挑発，通知，回答，侮辱，宣伝，デマ，欲望，ダイヤモンドと糞等など，すべてがごっちゃまぜに共存しており，そこには，時々怖くなる程あらわな人間の心象風景が暴露されている。それらは，今日現れたかとおもうと，明日は消え去り，常に変化する有機体のようなものである。助言が必要とならば，関連のニュースグループに名乗りをあげればよい。意見交換がしたければ，その相手にはこと欠かない。日本に興味を持つ外国人との意見交換であれば，例えば，日本語，日本文化などについて多くの疑問が寄せられているニュースグループ「sci.lang.japan」，「fj.life.in-japan」，「alt.japanese.text」をクリックすればよい。

時には私自身も思わず意見投稿をしてしまうことがある。たとえば，この間，複数のニュースグループの間で，「ドイツ人を憎む10000の理由」と題して，一部偏見に満ちた耐えがたい論議が沸き起こっていた。私が日本から発信していたせいか，北京大学のある物理学者が，Michelという名字にもかかわらず私を日本人だと思い込んだのであろう，非常に激しく攻撃してきた。「日本人の貴方にはドイツ人を弁護する権利など一切ない筈だ。ドイツ人は戦争責任を認め，改悛の情を示しているが，日本人は今日でも過去と真剣に取り組もうとしていないではないか。日本人は絶対に赦せない」等などと。以前新聞などで，中国の国民感情について色々と一般論として読んできているが，個人的なレヴェルの発言の迫力は比べものにならない。このような対話は，多くの日本人と隣国の人々との間でなされたらよいのだがと思いながら，その後も数回にわたって，Eメールを通じ北京の相手と過去の問題や未来のアジアのことを論じ合った。

少し「古びた」ので，一見それほど興味を引きそうでもないが，内容が豊富で学問的にもしっかりしているGOPHER-SPACEへ行ってみるのもいいだろう。私の場合には，普通国立がんセンター(IP-Adress:160.190.10.1)から入って，メニューを渡りながら世界中の各種研究機関にアクセスできる。キーの操作ミスで，癌症例データや他の医学的な資料集に入ってしまうこともある。21世紀の医師は情報で固められた患者を前にするようになることだけは確かなようだ。

TELNETも文字のみの情報システムである。最近は他の方法もあるが，文献を探すときには今でもカリフォルニア大学のMELVYL-System(IP-Adress:192.35.222.222)を使うことが多い。ここからはアメリカとイギリスの図書館などがつながる。研究文献を概観したり，文献リストを作ったり，あるいは，それらを書誌学的に補足する際，場合によっては，図書目録が大いに役立つことがある。

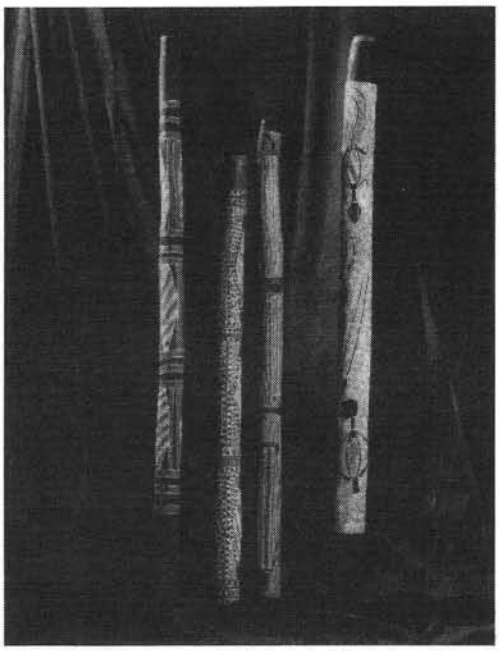
今日，公共の機関はほとんどが，上記の資料を始めとして，様々な文献，映像などをWWW(World Wide Web)を通じて公開するようになっており，こ

れまでのネットワークは将来的には後退することになるだろう。また，Netscape 社の優れたソフトウェアのおかげで，WWW も Gopher なども同じブラウザで利用できるし，電子メールの送信も簡単である。

すでに多くの大学が WWW に「ホームページ」を載せており，そこからマウスクリックにより次々と図表や写真，入学の条件や教官及び講義内容，電子メール等への接続が可能になっている。留学したいと思えば，ここで情報が得られるし，読んだ論文についての質問があればその著者とのコンタクトも大低は取れる。学術論文のテクストデータベースがあれば，イラストを含めて全文を自分のＰＣへコピーできる。

一流の新聞社の主な記事は「Web」で読めるようになっており，読者の投書も直接編集部のコンピュータに入る。放送局や通信社，政党，政府機関，企業等，Web の写真と文字情報はメディアや政治，経済面にも新たな局面を開いた。

Yahoo などの検索システムのお陰で2，3のキーワードで世界中の関係機関などが画面にリストアップされる(http://www.yahoo.com/，http://galaxy.einet.net/，http://www.dejanews.com/ 等など)。上手に絞っておかないと，その量のため詳しい検索をやめたくなることもよくある。海外の本などの購入も簡単になってきた。オーストラリア原住民の楽器 didgeridoo(右の写真)の響きに魅了され，その入手の方法についていろいろと調べてみたが，今年になって，それを取り扱うオーストラリアの店がホームページを設置していることが分かり，長年の夢がやっと叶えられた。



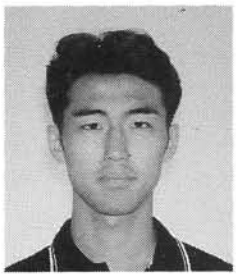
この情報の海の上層は英語によって形成されているが，少し下層に潜ってみると，様々な言語と文字に触れることになる。ある情報がどこにあるのかわかっていても，それが読めなければ何の役に立つだろうか。できるだけ多くの言語について，その基礎知識を持つことが，これまでになく重要になるだろう。

この新世界の可能性は無限の広がりをもっているように見え，探険家はそれに圧倒されかねない。時間と空間の観念は消失し，遠方のものも近く感じられ，苦労せずにすべてがいつでも手に入りそうな思いにとらわれる。しかし，このみなぎり溢れる情報はとても吸収しきれないし，またそれらをすべて手に入れることが人生のすべてでもない。ネット・サーフィン中毒にご用心を。ホーム・ページをリンクしながら滑り続けるのは，とても楽しいことだが，目的を見失ってしまうと，いくらサイバー空間を飛び回っても，仕事や勉強には行き詰まってしまうことになる。さまざまな誘惑に対して抵抗力をつけておくことが大切である。重要なものとそうでないものとを区別するには，これまで以上に自立心や自己規律，それに判断力が必要となる。それらを養うには，学校教育で与えられる単なる知識だけでなく，実社会での豊富な体験も蓄積しておかなければならない。10歳の息子，萬里雄にとってはまだ，この２次元の映像の世界より，山や海での遊びの方が大切だと思っている。

画面に現われる情報は，一定の団体が，一定の観点で選択，加工，編集し，一定の目的を持って流されているものであるから，批判的に見ていかなければ，狭量になり，操作されかねない。また，自分の部屋から表面的に，自由に外国の人々と接していると，彼等が自分とは異なった人間なのだという感じが薄れてくる。遠いことが，直接体験できたと信じ込んでしまうので，身近なものに思えてくる。自分の殻から出て，努力して異国の人々に近づき，失敗を克服しながら一緒に行動をとることは，サイバー空間においてはなかなか無理である。確かに画面の上での旅は，仮想旅行者(http://www.vtourist.com/vt/)に，これまでのどのメディアより，カラフルで，詳しく，また最新の情報を遠くの世界から届けてくれる。しかし，それらは，空の色，季節の移り変わり，食べ物の匂い，都市や村のざわめき，人々との出会い，会話，討論，広場や博物館，山野での新たな自然の発見等などには，到底代わり得るものではなく，実際に，その国を旅したことにはならないのである。

(言語文化部)

(ホームページ：
http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/～michel/)



自己実現に向かって

澤野伸弥

皆さん，九大にサッカー部があることはご存知ですよね。そうです，六本松のグラウンドで放課後ボールを蹴っている団体です。皆さんが講義を終えて帰途に着こうとする時などに，よく私たちの活動が目に止まるのではないでしょうか。今回は，私たちの表面的なものではなく，より深いところの活動内容というか考えを私なりに皆さんに伝えたいと思います。

さて，皆さんが大学に入学されて六本松キャンパスの門をくぐられると，まず，サークルの勧誘の嵐を受けたのではないでしょうか。「□□部に入らんね」「△△同好会に入りませんか」「お，君いい身体しとうね」etc…… しかし，皆さんの大半は『大学に入ったら別にキツイ事せんで，楽しいサークル活動をしよう』と思っているのではないでしょうか。

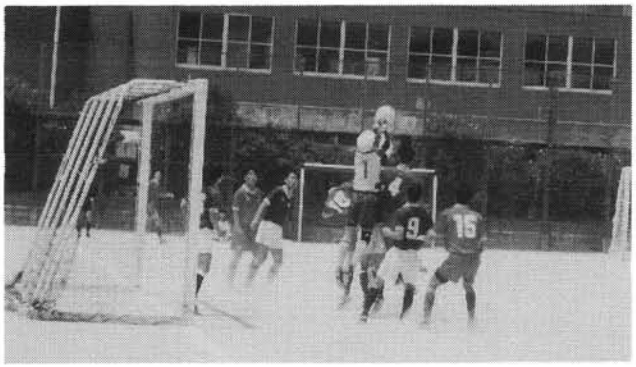
私たちは通称〝体育会系〟と呼ばれる，一般に厳しい印象がある運動部ですが，だからといって自ら苦しむために入部したわけではありません。サッカーが好きだからこそ，自分の可能性を試すためにキツイ練習にも耐えて，4年間続けているのです。なぜ，それができるのかというと，私たちには確固とした目的があるからです。それは単に楽しくやりたいというものとは違う，自己実現といった言葉で表現できるもので，スポーツを楽しむだけでなく，それを競技として認識し，試合という舞台で自分達のやってきた事を表現し，勝利へとつなげることです。一般に〝サークル〟と呼ばれる同好会との違いは，まず，ここに現れてくると思います。

次に，表現の場の違いがあげられます。同好会も同好会や社会人等と混ざった大会に出るでしょうが，私たちは，大学の中でもメインとなる大会で，その大学の看板を背負って試合に臨むわけです。それは，全国といった大舞台にもつながっており，より大規模な場で，日頃の練習の成果を発揮できるわけです。このことも，私たちの励みになるのです。

さらに，全ての運動部が，というわけにはいきませんが，専門の指導を受けられるということです。私たち学生だけでは行き届かない点や，誤りがちな点を，豊富な経験に基づく適切な指導により，私たちの目標達成をサポートしてもらっています。

私たちは学生ですから，もちろん，学業といった本分がありますし，バイトなどの制約を受けます。大学時代というのは好奇心旺盛な時期です。多方面に手を伸ばすのもよいでしょうが，1つの事をやり遂げる，努力する，そんな力はいつの時代でも必要なのではないでしょうか。同じボールを追いかける，同じ目標に向かって走る，違う学問分野を学びながらも，真剣に1つの事に向かい合える，そんな環境が私たちの部活動にはあるのです。

さて，私たちは，一昨年，念願の九州リーグ2部(九州の大学50チームのうち1，2部各8チーム)昇格を果たし，リーグ戦で活躍が認められ，特別賞を頂きました。現在，箱崎からの移動の不便さで，練習に部員が揃わない厳しい状況ですが，春休みには筑波大学へ遠征を行うなど，1部昇格を目標に，悔いを残さないために日々活動中です。 (工学部4年)



45年まえの六本松キャンパス

新制九州大学は，旧制福岡高等学校と久留米工業専門学校を吸収合併して，1949年に発足しました。下の図は1951年当時の第一分校（六本松）の配置図です。

1949年6月　新制九州大学第1回入学試験
　　9月　第1回入学式
　50年3月　旧制福岡高等学校終了式
　　6月　朝鮮戦争勃発
　51年3月　第三分校を第一，第二分校へ統合廃止
　　9月　福岡女子大宿舎敷地を譲受け（田島）

当時は教養課程の2年間を分校で過ごすことになっていました。旧制福岡高等学校を引き継いだ第一分校の学生数は一学年文科320，理科240，2学年の合計は1,120名です。

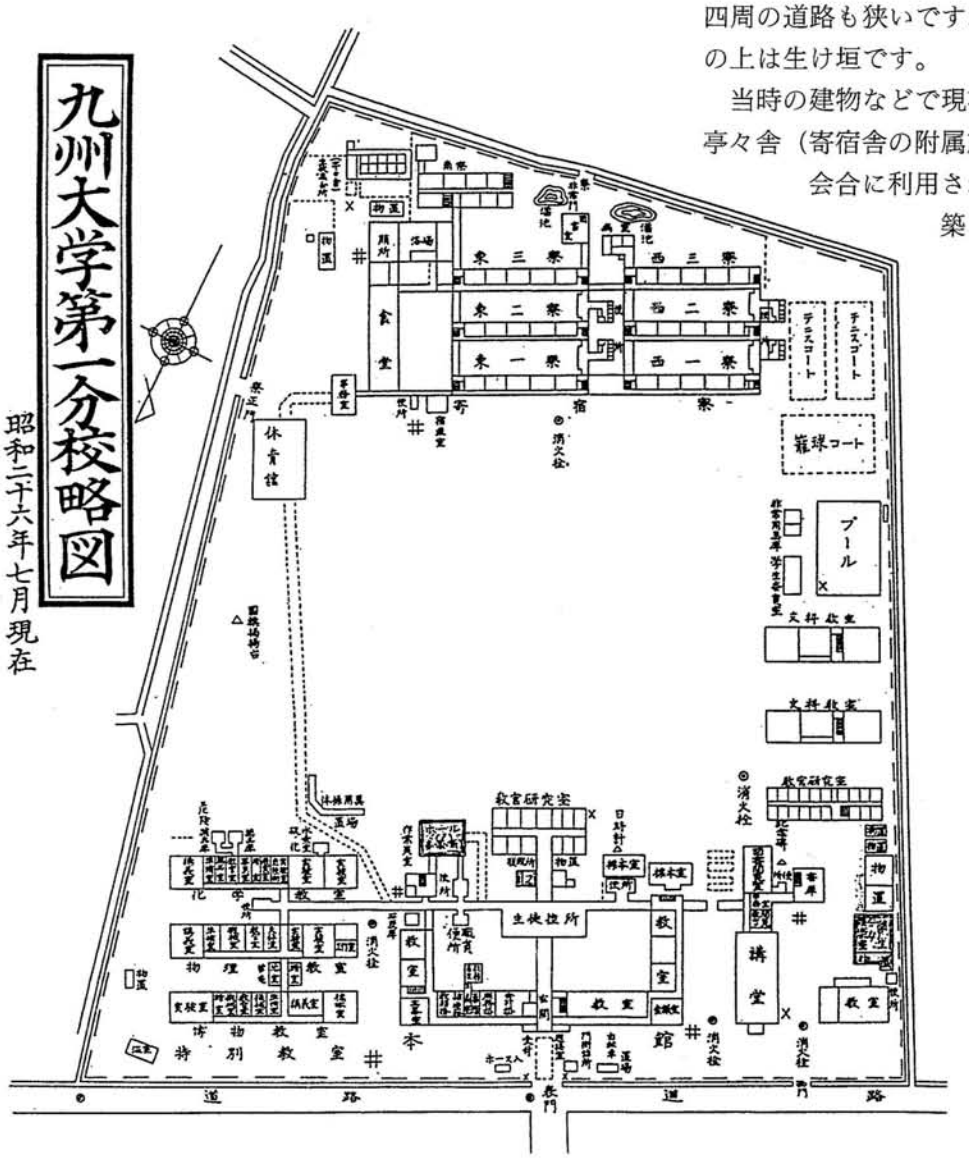
入学試験の教科は，国語，社会，理科，数学，外国語で，社会と理科，数学は2科目，外国語は1科目の選択だったようです。1952年の入学料は400円，年間授業料は1,800円でした。

図を見ると，分校の周りには細い水路が通っており，四周の道路も狭いですね。内側の破線は土手で，土手の上は生け垣です。

当時の建物などで現在も残っているのは，南東隅の亭々舎（寄宿舎の附属施設で青寮と呼ばれ，コンパや会合に利用されていた），プール，東門横に移築された亦楽斎（1932年に思想善導費で建てられた。1階がホールで軽食が用意され，2階は和室で会合に利用されていた），それと図書館前に移された日時計です。

南側にある寄宿舎は福岡女子大学から譲り受けた田島の敷地に，順次移築されました。

（九大教養部三十年史，工営掛資料より　編集委）



お詫びと訂正

radix 8号の8頁，学生会館第31回文化講演会講演要旨のタイトルで講師のお名前を間違っておりました。

正　小此木　啓吾　氏
誤　小比木　啓吾　氏

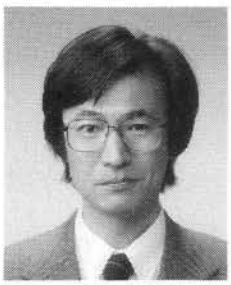
謹んで訂正いたします。

radix 編集委員会

〈新任教官自己紹介〉

自己紹介にかえて

木塚 崇



数学の研究らしきものを始めてから二十年が経ちました。漸く自信を持って言えるようになったことは，数学の表現様式と数学の実体とは別のものだと言うことです。それは，地図と実際の地勢の関係のようなもので，地図を読むことや，地図そのものと，その土地そのものや，その土地に住んだり，歩いてみたりすることが，全く異なっているように，数学の本に書いてあることと，数学そのものとは，全く異なっていると思うのです。これは，数学の本を読むことに意味がないと言っているのではなくて，むしろ大学で学ぶべきことのうちで第一番目に当たるのが，このように大きな隔たりのある地図と実際の地勢の差を理解して，地図を効率的に利用しつつ実際の地勢を把握してゆく，そのような技術を習得することではないかと思っているのです。勿論これは数学に限った話しではないと思います。

小さいころ樽を住処として若い人々を指導する哲学者の話を読んで，強い印象を受けました。真実は，権威や権力で飾りたてる必要のないものです。東洋ではそういうことを，三才の童子も我が師であるという言葉で表したりします。学問を情報の集積として見るとき，誰でもその膨大さに圧倒されるのではないでしょうか。しかし，それは大量の地図に過ぎません。山に登って，美しい花を見つけることこそ，人生の醍醐味（チーズ味って言うと全然意味が通らない。チーズが未だに不可思議な食べ物であったとすれば，又，事情が違ってくると思いませんか。）と言うべきです。新入生の皆さんの健闘を祈ります。 （数理学研究科）

自己紹介

金宰賢

今年の4月より大学院比較社会文化研究科基層構造講座の助手として着任いたしました，金宰賢（キムザイヒョン）です。専門は考古学です。韓国での学生時代は韓国三国時代の高坏にみられる地域性について研究し，加耶地域の短脚高坏を中心に修士論文をまとめました。

韓国では修士卒業後に博物館助手として3年間勤務し，青銅器時代の貝塚，三国時代の土城・古墳，新羅・高麗時代の廃寺，朝鮮時代の倭城などの発掘調査に携わりました。そのなかで近世以降の人骨が出土したことがあり，その当時人骨に対してマイナス感情のなかった私は，他の人が断わったこともあって，そのようなときにはいつも人骨調査の担当になりました。ただし，人骨を中心とした研究を行おうと決心したのは，留学を決心する1年前のことです。

留学して最初の1年間の研究生時代には，ゼロから始めた人骨の研究でしたし，その他にも初めての留学生活に戸惑うことも多く，時間を有効に利用できないときもありましたが，いま思えば現在の自分の研究生活の基本などを形成した貴重な時間であったと思います。

私の現在の研究テーマは，古墳から出土する人骨についての形質人類学的な情報に，考古学本来の遺物としての出土情報，さらに共伴する副葬遺物などの情報を加え検討することによって，当時の人間の埋葬に関わる意図・行為を復原し，そこにみられる社会関係の解明です。

九州大学の皆様方，今後ともどうかよろしくお願いいたします。 （比較社会文化研究科）

〈新任教官自己紹介〉

自己紹介

高橋里美

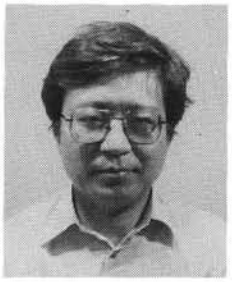
私はこの4月に東京より言語文化部（英語科）に赴任してきました。しかし，私の場合，東京からの赴任というよりは，ハワイからの赴任と言った方が的を得ているように思われます。というのは，つい昨年，6年間のハワイ滞在の後帰国したばかりだからです。私は1989年からハワイ大学大学院で第二言語習得学の研究をし，昨年5月に同分野の博士号を取得しました。さらに，1991年から4年間，ハワイ大学に隣接するイースト・ウエスト・センターで，英語を媒介とした異文化間コミュニケーション関連のプロジェクトに参加する機会にも恵まれました。この両研究・教育機関で得た様々な知識と経験を是非日本で生かしたいと思い，帰国後すぐに日本の大学の門戸を叩いた次第です。

さて，私の専攻分野について詳しくお話ししましょう。第二言語習得学は応用言語学の一分野で，第二言語学習者がどのようなプロセスで目標言語を習得していくか，そして，どのような要因がその習得プロセスに影響を及ぼしているかを探究する学問領域です。言語学同様，音声・語彙・文法・意味・語用の各分野で研究が進められていますが，私は特に語用論レベルでの研究を主な対象としてきました。母国語でコミュニケーションする場合，私達は常に対話相手の年齢・地位・性別といった社会的要因を考慮に入れ，その場面に最もふさわしい表現を選択しています。問題は，これと同じような的確な表現選択作業を，第二言語学習者はその対象言語でのコミュニケーション時にできるかどうかということです。できないとすれば，何が原因となっているのか。母国語からの影響はあるのかどうか。私はこのような研究を過去6年以上に渡り行なってきたわけです。今後は，この分野の研究をさらに進め，第二言語学習者がその目標言語で円滑なコミュニケーションができるようなカリキュラム作成に，少しでも貢献していきたいと思っています。

（言語文化部）

自己紹介

栃原　浩



工学部応用理学教室（六本松地区）に平成8年4月1日に着任しました。九大六本松地区は，私にとってその昔1年半の間お世話になった所です。思いもかけず再び，今度は教官としてお世話になることになりました。

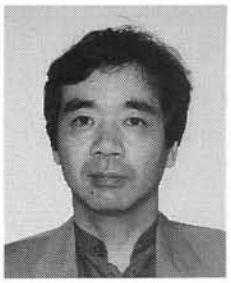
六本松のあと堅粕の薬学部・薬学研究科と進み，博士課程を中退して学習院大学理学部の助手に採用され，そのあと東京大学物性研究所，北海道大学触媒化学研究センターと変わりました。現在の専門は「表面物理学」で，固体表面の構造と物性を実験的に研究しています。学生のときの専門から全く変わり，かつ各大学を移り変わった研究者はそう多くないと思います。計画的かというとそうではなく，もぐらのように目先の研究を片づけることに悪戦苦闘を続け，気がついたらこうなっていたというのが実際のところです。

自然科学研究における地方と中央の損得について，その両方を経験したものとして少し述べたいと思います。確かに，東京は著名な外国人研究者が訪問しセミナーを開いたりする機会が多いし，新製品の情報・デモにもすばやく接し恩恵を受けることもあります。しかし，情報過多になりやすく，自分自身のアイデアをじっくりと育てることには不向きのような気がします。札幌では逆に，周りにとらわれることなく自分の個性を発揮させることができました。又，住宅環境も良く，最近は電子メールの発達により国内はもとより海外の研究者ともほとんどリアルタイムで通信可能になっています。このような意味で，福岡は私の研究にとって良い環境ではないかと期待しています。　（工学部）

〈新任教官自己紹介〉

自己紹介

長野 剛



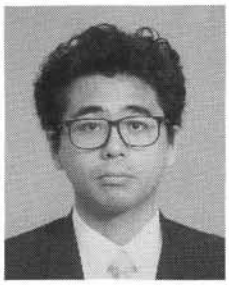
①ちょっと古くなったがユーミンとオフコースが心地よい ②生まれ変わったらjazzピアニストを目指したい ③感情機能が未分化なまな年を重ねておりどうしたら立腹できるのか迷うことがある ④休日に広い草っ原で犬と一緒に日向ぼっこをして過ごすのが夢 ⑤囲碁，将棋，魚釣り，ゴルフをしようと思ったことがない ⑥締切りが過ぎてからでないと物事に取り組めない ⑦自分の力量を心得ていないので，断ることを思いつかず，後になってえらく苦労することが多い ⑧時間感覚はなきに等しいほど未成熟なため，手帳があっても使いこなせない ⑨電話のベルの音が恐ろしく感じられるほど引っ込み思案になってしまう日が時々ある ⑩パワー勝負はからきし駄目なのでテクニックとスピードで勝負しようとしてきたが，新入生と接すると，それも限界にきていると痛感させられている。以上，⑪不思議なことに締切り前にこの原稿を書いて（打って）いる。

現在，出たとこ勝負の私にしてみると，かなり体系的に取り組んでいるつもりになっているのが眼差しの研究です。サングラスの色によって同じ風景が異なった風情として心に映ります。同じ色に見えるサングラスでも，試しにかけ比べてみると，メーカーによってかなり異なった色合いで見えるので驚かされることがあります。同じ事象（社会的出来事，会話，物理的現象など）を共有していても，そこに何を読みとり，それにどんな意味づけを行なうかは，人それぞれです。このことを，サングラス（眼差し）の特徴に沿って説明してみようというのが研究主題です。眼差しはサングラスのようにかけはずしができず常用しているので厄介です。なぜなら「あなたの眼差し特性は云々」と指摘しても，「おまえの眼差し特性にはそう見えるだけ」と切り返されると，「ごもっとも」だからです。

（大学教育研究センター）

九大生は親切だ！

松田光司



5月1日付けで比較社会文化研究科日本社会文化専攻文化構造講座の助手として着任いたしました。生まれも育ちも京都です。福岡どころか他の地で生活するのは初めてです。

着任するまでは，龍谷大学大学院理工学研究科数理情報学専攻の博士後期課程2回生でした。上記のとおり情報系の学科を出ていることより比較社会文化研究科が計画している計算機室の管理を任される予定です。

前の大学の研究室は，「カオスとフラクタル」で有名な山口昌哉先生のところにいました。そこで，主にカオスの応用について研究をしました。修士論文は「閾値モデルより導き出される力学系の流行現象への応用」というタイトルで，カオスの流行現象への応用を試みました。この研究を通して社会学者と交流を持ち現在は，数理社会学を専門に研究しています。

最近の研究テーマはカオスから少し離れて社会的ネットワークの研究をしています。具体的には，ある集団で誰がどれだけその集団に影響力を持っているかを調べることを目的とし，簡単な調査法で得たデータからネットワークを使った数学的手法で背後に潜んだ影響力を浮かび上がらせようという研究です。この研究科には関連分野の方がたくさんいらっしゃるようなので楽しみにしてます。

最後に，採用される前にこの六本松キャンパスを見学しに来たときのことです。バスで「九州大学にいくにはどこで降りたらいいですか？」と聞いていたら「私は九大に行きますから一緒に降りましょう。」と学生さんが言ってくれて九大まで親切に案内してもらいました。その時「九州大学ってこんな親切な学生さんばっかりなのか？ 」と思って感動しました。その時の学生さん，どうもありがとうございました。暇だったら私の研究室に遊びに来てください。コーヒーぐらい出しますよ。

（比較社会文化研究科）

六本松地区教職員異動

（省略）

九州大学六本松地区ホームページのタイトルイメージ（15頁参照）

表紙写真募集

編集委員会では，引き続き表紙を皆さんの作品で飾りたいと考えています。写真，絵画，いろいろな趣味をおもちの方，「作品」のカラー写真をご提供ください。また，周りにそのような方がいらっしゃいましたらお知らせください。早速編集委員がお訪ねします。

応募される方，推薦対象の方の範囲

○九州大学生，卒業生，元在学生

○全学共通教育に関わる教職員，非常勤講師

○六本松地区の旧教職員

応募，推薦先

radix 編集委員　井上（農学部）　岡野（言文）
小山（大教セ）　高野（比文）　濱野（健康セ）
深江（専門員）　前園（数理）　吉田（健康セ）
または**六本松地区企画掛**（本館１階奥）

トピックス・エピソード募集

六本松地区にまつわる話，関わる出来事などをお知らせください。編集委員が取材に参ります。また，投稿を歓迎します。応募先などは「表紙写真」と同様です。

あとがき

「45年まえの六本松キャンパス」は知らないまでも，20年程前に大学に入った私・編集子は，「就職するまでの執行猶予期間」という思いでさしたる目的もなかったことを覚えている。バブルがはじけ就職状況が極めて厳しいとされる今日、そのように悠長に構えている人は余りいないかもしれないが，ある意味で社会的な束縛が少ない（受験勉強から解放され，朝眠気をもよおしながら授業にでるということはあっても，働きにでるということはなかろう）大学生活は，様々な経験ができる。「自己実現に向かって」クラブに打ち込む人もいよう。近くは「鴻巣山」や「和白干潟」，少し遠出をして「九重」で「自然」に触れ，リフレッシュすると同時に自然と人間との関わりについて思索するのも大事だろう。本の世界を「東へ西へ」，あるいはインターネットのサイバースペースで“遊ぶ”のも楽しかろう。「ＨＩＶ訴訟」のような問題を通じて社会とのつながりを求めることだってできる。もちろん将来は「大学院」に進学して「大賞」受賞をねらうような勉強をしたいと思っている人もいてよかろう。様々な束縛から比較的自由な“執行猶予期間”，皆さん方はどのような思いで過ごしていますか。（信）

radix（ラーディクス）　No. 9　（九州大学全学共通教育広報）

発行日　平成８年６月28日
発行所　九州大学大学教育研究センター

〒810　福岡市中央区六本松4—2—1
電　話　(092) 726—4526・4525（企画掛）